と各種の建物に出入せし人間の生きた姿と、最後の慘禍の光景とは具象化されて眼前に展開する。

ポムペイに人もすなる見物をしたが、扨て何を見て歸つたか。暫く讀者の耐忍を乞うて、小説と發掘物と併行して、筆者自らを再び案内して見たい。

新著紹介

○小川博士還曆記念論叢　京都　弘文堂發行

小川博士の還曆記念の論文は非常に多數に集まつたゝめに印刷所の進行意の如くならず、還曆の祝日に後くれること數ケ月にして、本年十月二十八日漸く版行せらるゝに至つた、之を二部に分つて、第一部は歴史及地理に關した論文を集めた今其要目をあげると支那古代の稻米稻作考「岡崎文夫」人文傳播に關する一考察「喜田貞吉」古文尚書に關する一二の小研究「神田喜一郎」讃岐の人口稠密なる原因の一部に就て「寺田貞治」公羊疏作者時代考「狩野直喜」盛壁考附瓊璣「濱田耕作」唐光啓元年書間沙州伊州地志殘卷に就て「羽田亨」唐代圖州廻城疆域考附營州廻城考「那波利貞」元和航海記航路の研究「藤田元春」元代奴隷考「有高巖」考古學上より見たる漢代文物の西漸「梅原末治」露蒲關係の研究「下田禮佐」近世に於ける耕地荒廢と小作問題「牧野信之助」先史學史の一節「小牧實繁」桂女の研究「江馬務」伊賀に於ける聚落の研究「村松繁樹・キルギス、ステップ地方の景觀「宮川善造」八思巴文字に寫された漢文音「鶯淵一」我南洋諸島に於ける氣候と着衣問題との關係を論ず「内田寛一」琅玕考「新村出」港市としての坂本「中村直術」陽明詩「高瀬武次郎」賈魏公年譜「内藤湖南」ペトルス、アピアヌスのコスモグラフィア最初の諸版について「小野鐵二」九州地方聚落の人口地理的考察「石橋五郎」の二十六篇、四六倍大版一千三〇五頁に達する尨大なる册子になつた、定價十圓。

第二部は理學部關係の人々の論文であつて、その題目は、土城中の鐵結粒「脇水鐵五郎」宇部炭田地質時代の對比「德永重康」第四紀層の續成作用について「西尾鉦次郎」鑛物の結晶形と化學成分に就て「石川成章」臺灣第三紀有孔虫岩の層位學的研究「矢部長克、半澤正四郎」駒ケ嶽火山爆發によりて生じたる鹽化アンモニウムの成因に關する一考察「神津俶祐」噴火と植生「那場寛」伊豆國土肥鑛產金銀鑛脈の成生並に二次的銀鑛の成生に就て「加藤武夫」大阪市地質概觀「山根新次」玄武岩の磁性に就て「松山基範」花崗岩に於ける角閃石と黑雲母との關係に就て「坪井誠太郎」北海道西部の地體構造と火山の分布「渡邊萬次郎」地下硫化鑛體の帶電原因に就て「松原厚」滿洲產菱苦土岩中の桂狀體及桂狀構造の觀察「新帶國太郎」關東南部の洪積層「福山次郎」本邦に於ける火成岩地質學の諸問題「本

間不二男」駿河國西部に於ける火成岩の化學成分に就て「山崎直樹」七萬五千分之一地質圖幅鳥羽を讀みて其地域の構造を解釋す「小澤儀明」日本弧の形と大さ「熊谷直一」信濃國北部千曲川弧狀及放射狀斷層に就て「君塚康治郎」關東州大和尙山に於ける震旦系珪岩層と片麻岩との關係について「松下進」薩陵島產曹達サニデイン岩「春本篤夫」甲府盆地西方山地の地形について「田中元之進」人吉盆地の地貌「下間忠夫」濟州火山島「原口九萬」支那海州鉛屏鑛山燐鑛床に就て「田中館秀三」石油成因說最近の問題「高橋純一」噴出岩によりて變化せる石炭の性質「上治寅次郎」外觀的不整合の形式「德田貞一」朝鮮寒武系概觀「中村新太郎」以上三十篇、同じく大册にて七〇一頁圖版多數、この方も定價十圓

一部、二部を合せていづれも部厚な論叢になつたので雖者は未だ之を通讀するの遑を持たぬから一々之を批判することは出來ない、大家小家欝然として各其の力をつくしたことは事實である、予はこの書の廣く世に行き渡らんことを望まざるを得ない。（藤田）

○支那土地制度研究　長野朗著　刀江書院發行

定價二圓二十錢

本書土地制度の踏査の部は、一通りの解說であつて、十分とはいへない。しかし民國以後の土地が、どうなつてゐるかといふことを知るには適當してゐると考へられる。いろ／＼局部的の統計が出てゐるから、それによつて大勢を理解されると思はれる。（藤田）

○人文地理學と文化景觀　國松久彌著　共立社發行

定價一圓八十錢

佐々木彥一郎氏、國松久彌氏、佐藤弘氏、松尾俊郎氏、飯本信一氏等の最近の業績が、共立社からの出版物として續々將に世に出でやうとしてゐる。それは政治經濟地理研究會といふ學會の名の下に刊行されやうとしてゐる多くの新刊書であるが、そのトップを切つてさきに佐々木氏の經濟地理研究が出で今度は國松氏の本書が出た。

本書は人文地理學はどういふ學問であるか、何を研究する學問であるかといふことを述べたものであつて、オツト・シュリューターの「人文地理學の目的」及同氏の「地理學體系中に於ける人文地理學の位置」の二篇を骨とし、モツシエレス氏の「人文地理學の論理的體系」（ブリューンの人文地理學の批判）の一篇を附錄にしたもの、三篇を合せて菊版二百二十四頁の本である、著者は原書の難解の部分を意譯したゝめに、挿入の文字が多いといつて遠慮してゐられるが、それでも第一篇の方は之を讀み下すのに骨が折れる。讀み易くわかりいゝといふ點からは第二篇の譯述の方が勝れてゐる、蓋し人文地理學に於てはその環境をみよ、さうして我等の考察の一般的觀點を地理學のうちにのみ求めてはならぬ、我等は個々の文化科學を今日よりもはるかに多く論及しなければならぬと述べたシュリューターの大きな叫びに敬意を表せざるを得な

いさうして彼はまづ原始景觀を確立せよ、然る後之を文化景觀にまで變化さした人間の活動に見よ、そこに人文地理學の研究すべき多くの問題があると敎へたのである。予は讀者に本書を出版されたことを感謝したいと思ふ。(藤田)

○埴科郡鄕土研究第一輯　長野縣埴科郡鄕土研究會

北信濃の中心で古墳の優秀なものゝ多い埴科郡は地理的にも人文的にも研究すべき題目が多い、そこで同郡の識者は鄕土研究會を起して熱心に各種の題目を研究發表することになつて、こゝに其第一輯が世に現はれたのである、本輯には地質、皆神山の山椒魚、以上自然界の記事であり、人文地理としては埴科郡西部の集約農業といふのがある、歴史部では古墳、手打騒動、象山先生の血に繋がる人々、虹雅考といつた諸篇がのつてゐる、いづれも面白い讀物であるが非賣品であるのを殘念だと思ふ。(F)

○土器石器　八幡一郎著　古今書院發行

定價一圓八十錢

東京帝國大學人類學敎室に居られる八幡一郎氏の永い間の研究、人類學雜誌や考古學雜誌にのせられたものを集成して四六版二一五頁の手頃な本が出來た、これをよんで繩紋式土器と其に關係した石器、彌生式土器とそれに關係した石器との區別や分布がわかつて、先史時代の研究に對する著者の用意を知ることが出來る、予は敗石遺跡の新資料や北海道禮文島の石器などの報告を得たことを著書に感謝したい。(藤田)

雜報

○樺太森林の飛行機測量　本年七月八日より十月廿八日までの間を以て樺太森林の飛行測量が出來た、廿日間の中實際に作業の出來るやうな良い天氣はたつた四、五日しかなかつた、樺太島内に新しく飛行場をつくり、その根據地から四臺の八八式新偵察機が出た、最初は五十萬町歩を豫定したのであるが、以外に進捗して七十萬町歩の寫眞がとれた、この寫眞測量によつて林相、地形、面積等がわかりやすく計算ができる、これ迄の普通測量に比べて短時日にこの調査が出來たことは何といつても測量界の一大革期であると思はれる。

○京都市内の車　現在京都市にある諸車の數は十一萬八千三百四十臺今から二十五年前には二萬八千五百八十四臺しかなかつた、しかもその間に車は改良された第一は自動車の出現である、京都に初見の自動車は、明治四十年英國製のホツバー(時價五千圓)を市内の某氏が自用に買入れたのに初まる、四十四年に二臺となり、大正元年に四臺、同二年に十八臺となり、大正三年の御即位大典の年に四十二臺になつた、それからは大に增加し大正八年に百四十九臺、この年に自動車營業組合が百五十名の組合員を以て組織されたと同時に人力車が沒落した、大正十四年には市内に圓タクが走り昭和四年には二、三二四臺に增加した、然し本年になつて一、六五